

カバディ競技選手の体格に関する研究

A Study on the Height and Weight of Kabaddi Players

金子 茂

Shigeru Kaneko

I 研究目的および方法

インドの国技・カバディ競技が日本に紹介¹⁾されたのは、1979年（昭和54年11月）である。インド国カルナタク州バンガロール市のヴィジャヤ大学のスンダル・ラマ教授（Dr. Sundar Rama）が、千葉県市川市と東金市の小中学校生徒に実技指導したのが始まりである。以来、20年が経過した。途中、日本カバディはしばらくの停滞期の後、1988年（昭和63年9月28日日）国立代々木第2体育館で、日本アマチュアカバディ協会（Japan Amateur Kabaddi Association, JAKA）の招きで来日したインドのカバディ男女オールスター選手と対戦したのが、二松学舎大学の男女チームなどである。日本における大学カバディクラブ結成の最古を記念して、二松学舎大学沼南校舎の図書館前に「大学カバディチーム発祥の地」という記念碑が建立されている²⁾。

カバディは、すでに第11回北京アジア大会（1990年）、第12回広島アジア大会（1994年）、第13回バンコクアジア大会（1998年）と、3回ものアジア大会の正式種目となっているが、日本ではまだマイナー種目というところから脱し切れないでいる。カバディは、単純であるが、スポーツの持つく遊戯、激しい身体活動、闘争>といった三つの要素³⁾を存分に満喫出来る大変奥の深い競技の一つである。特に、カバディは、レイダーという攻撃手が相手のコートに入って、カバディ、カバディ、カバディ…といいながらタッチをするため攻め続けて、自分のコートに戻ってくるということが必要である。しかも、レイダーは相手コートに足が触れる前から自分のコートに戻るまで、カバディという単語をいい続けることが規則で決められている。苦しいからといって、途中で息を継いではいけないのである。息が続く一呼吸の間に自分のコートに戻ってくるということが要求される。運動生理学的見地からもカバディは、レイダーが攻撃中に息をしない無酸素状態で、カバディという用語をいい続けることと、レイダーの発声するカバディ、カバディが見ユーモラスであるところなど、他のスポーツに類を見ない大変ユニークなところがある。

カバディはインドを頂点として南アジアの諸国では小さい頃から遊びとして、またスポーツ競技として行われている。カバディ競技は、狭い場所で何も道具もいらず行うことができる^{4,5,6,7)}。そのような背景の中でカバディは、それらの諸国では、国技として行われており、大衆のスポーツとして大変人気のある種目である。

前置きが長くなったが、本稿では、アジア大会出場の全日本選手、第8回南アジア大会出場選手、第12回広島アジア大会出場選手の身長・体重・年齢、第13回バンコクアジア大会出場選手の体重に焦点をあてて、平均値・標準偏差などを用いて、男子カバディ選手の身長・体重がどのくらいなのか、その実態を統計的分析を通して考察を行っていくものである。日本およびアジアのカバディ選手が、他のスポーツ種目選手の中でどの位の体格をしているのかなどを把握しておく

ことは、基礎資料として大変意味のあることであると考え。

II 結果および考察

1. アジア大会出場全日本選手の身長・体重・年齢⁹⁾の平均値・標準偏差

表1は、第11回北京アジア大会、第12回広島アジア大会および第13回バンコクアジア大会出場全日本選手個々の身長・体重・年齢を示したものである。また表には各大会出場選手の身長・体重・年齢の平均値・標準偏差および相関係数が示してある。

第11回北京大会出場選手の体格は身長174.8 ± 3.3cm、体重68.6 ± 4.0 kg、第12回広島大会では、身長176.7 ± 5.1 cm、体重71.7 ± 4.4 kg、第13回バンコク大会では身長173.7 ± 4.4 cm、体重70.9 ± 4.6 kgである。数値では、第12回大会の身長が一番大きく、第11回大会と比較して、1.9 cm上回っている。体重では、3.1 kgも上回っている。第13回大会のバンコク出場の選手と比較してみると、身長では3.0 cm、体重では1.1 kgの上回りを示しているが、いずれも平均値には有意な差はみられない。三つの大会の出場選手を全部コミにして見ると、全日本カバディ選手の身長は175.0 ± 4.4 cm、体重では70.3 ± 4.5 kgである。相関係数は、 $r = 0.243$ と低いことがわかった。

ちなみに、二松学舎大学国際政治経済学部平成11年入学1年生男子(18歳)の身長172.3 ± 6.0 cm、体重63.7 ± 8.3 kgと、アジア大会出場全日本カバディ選手(三つのアジア大会出場選手コミにした)を比較してみると、二松学舎大学が身長で2.7 cm、体重で6.6 kgも下回っていること

表1 アジア大会出場全日本選手の身長・体重・年齢 (男子)

第11回北京アジア大会 1990年9月～10月				第12回広島アジア大会 1994年10月				第13回バンコクアジア大会 1998年12月				三つの大会出場選手を全部 コミにした N = 32			二松学舎大学 国際政治経済 学部平成11 年度1年生 18歳 N = 64				
選手名	身長	体重	年齢	選手名	身長	体重	年齢	選手名	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢		
H. I.	171.0	64.0	22	J. T.	173.0	70.0	24	K. I.	182.0	71.2	28								
I. A.	172.0	68.0	23	H. H.	178.0	72.0	24	T. K.	175.0	74.3	25								
M. I.	182.0	68.0	19	T. I.	178.0	65.0	20	T. N.	174.0	72.2	26								
S. T.	175.0	72.0	23	S. K.	180.0	79.0	23	S. S.	172.0	69.1	25								
T. S.	174.0	69.0	21	M. I.	183.0	70.0	21	M. O.	170.0	67.5	24								
U. S.	173.0	75.0	22	K. N.	181.0	70.0	20	K. M.	173.0	74.6	24								
M. S.	175.0	68.0	23	T. Y.	167.0	79.0	20	R. N.	172.0	77.1	23								
K. C.	181.0	72.0	20	T. O.	182.0	75.0	20	Y. K.	170.0	63.6	23								
S. T.	176.0	65.0	20	T. K.	175.0	70.0	19	K. M.	168.0	63.6	23								
J. T.	173.0	64.0	23	R. S.	170.0	67.0	19	Y. I.	181.4	76.0	25								
R. M.	173.0	75.0	22																
H. M.	172.0	63.0	20																
身長	174.8 ± 3.3 cm			身長	176.7 ± 5.1			身長	173.7 ± 4.4			身長	175.0 ± 4.4			身長	172.3 ± 6.0		
体重	68.6 ± 4.0 kg			体重	71.7 ± 4.4			体重	70.9 ± 4.6			体重	70.3 ± 4.5			体重	63.7 ± 8.3		
年齢	21.5 ± 1.4歳			年齢	21.0 ± 1.8			年齢	24.6 ± 1.5			年齢	22.3 ± 2.2			年齢	18.0		
相関係数	$r = 0.2050$			相関係数	$r = -0.066$			相関係数	$r = 0.576$			相関係数	$r = 0.243$			相関係数	$r = 0.504^{**}$		

**印は1%水準で有意

がわかった。同様に、同じ18歳の全国値⁹⁾の身長172.1 cm、体重62.2 kgと比べてみると、二松学舎大学の体重が1.5 kgほど上回っているものの、体格的にはおおむね同じであるといえよう。とくに二松学舎大学の体重の標準偏差がやや大きく、標本特性を示している。

年齢についてみると、第11回の北京大会が、 21.5 ± 1.4 歳、第12回広島大会が 21.0 ± 1.8 歳、第13回バンコク大会が 24.6 ± 1.5 歳と年齢的に一番高い。11回と12回大会との間には0.5歳の差があり、11回と13回大会では、3.1歳もの差がみられる(1%水準で有意)。12回と13回大会では、3.6歳もの差がみられる(1%水準で有意)

カバディがアジア大会歴史上最初に正式種目になったのは、第11回北京大会である。この大会にはわが二松学舎大学から、当時文学部4年の須川裕君(平成2年(1990)3月卒業、現在国際審判員として活躍している)が出場を果たした。第11回大会の出場選手は、すべて大学生であった。第12回大会からは、社会人選手も加わるようになった。とくに13回大会では大学を卒業した社会人選手が多く全日本代表に加わって、年齢的に高くなっていることが数値に表れている。

カバディは、敏捷性、筋力、瞬発力、持久力、柔軟性などのいわゆる体力のほかに、体力をうまく活用しての攻撃・防御の技術獲得にも時間がかかる。また戦術や戦略などを理解し、チームにおける各選手の力を発揮するにはかなりの心理的、情緒的な安定が必要である。そんなところからも、年齢の高くなっていることはうなずけるところである。カバディの選手が最も力を発揮する至適年齢については、主観的な範囲であるが大学卒業後¹⁰⁾の数年あたりにあると推測している。とくに国際大会などに参加するチーム編成では、年齢のことも大変重要なポイントになると考える。

図1は、表1のアジア大会出場全日本選手、三つのアジア大会出場選手のコミおよび二松学舎大学国際政経学部1年生を図示したものである。

2. 第12回広島アジア大会出場選手の身長・体重・年齢の平均値・標準偏差¹¹⁾

表2は、第12回広島アジア大会出場選手の身長・体重・年齢の平均値と標準偏差を示したものである。身長ではパキスタンが 177.6 ± 6.7 cmと、一番大きい。標準偏差が6.7 cmとややおおきく、大小身長の混在が他のチームより強い。次いで、インドの 176.7 ± 3.4 cmと日本が 176.7 ± 5.7 cmと平均値で同じ数値を示している。

身長の各国間の比較をすると、インドとネパール間に4.6 cmの差がみられる(5%水準で有意)。パキスタンとネパールの間には、5.5 cmの差がみられる。パキスタンとバングラディッシュの間には、2.8 cmの差がみられるが、いずれも有意な差はみられなかった。身長で、4.6 cm～5.5 cmもの差がみられることは、カバディの試合に影響を及ぼすことは容易に予想できる。カバディでは、他のスポーツと同じように身長の制限はないが、代表になるような体力や運動能力に優れた身長が大きい、手足の長い選手がレイダー(攻撃手)として相手コートに攻撃に入り、7人のアンティ(防御側)¹²⁾に手や足を用いてタッチを試みようとする攻撃すれば有利に作用することになるだろう。しかし、身長が大きさが逆に俊敏な行動を妨げたりアンティに捕まえられたりして、自陣に戻れないことにもなるかも知れない。

体重についてみると、パキスタンチームが、 78.8 ± 0.9 kgである。参加国の中で一番重い。体重の標準偏差も0.9 kgと極めて小さい。このことは、先にみた身長とちがって、個々の選手の体重の隔たりが小さいことを示している。パキスタンの体重と各国との体重の比較をしてみると、パキスタンの体重の上回りは、インドに4.1 kg、日本に7.1 kg、ネパールに10.4 kgである(いずれも

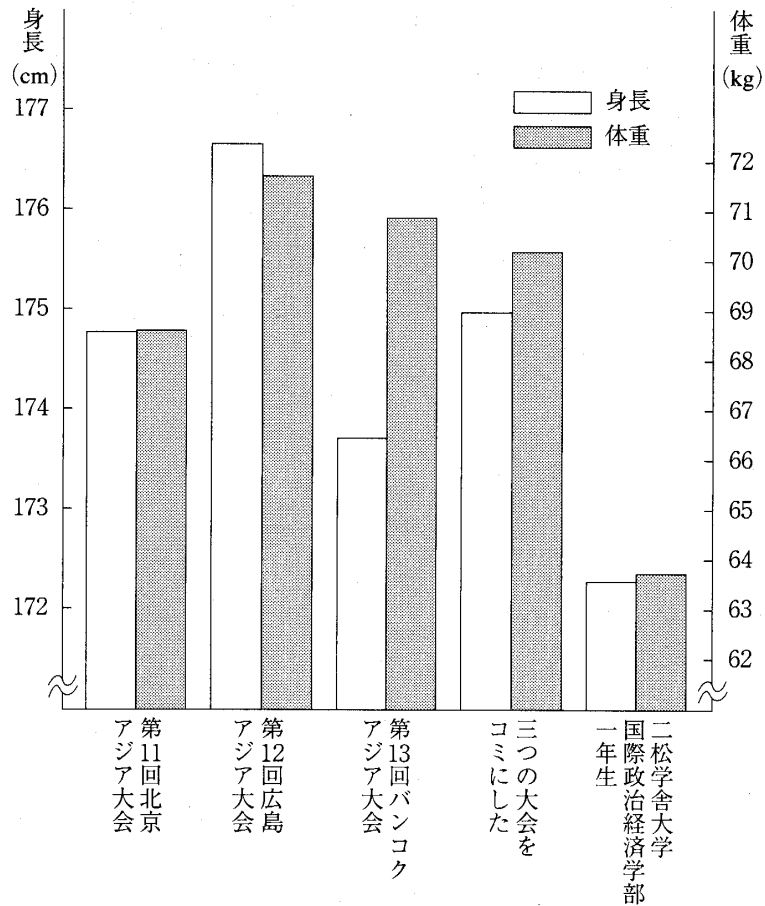


図1 アジア大会出場全日本選手の身長・体重

表2 第12回広島アジア大会出場選手の身長・体重・年齢 (男子)

背番号	インド (1位)			パキスタン (2位)			バングラデシュ (3位)			日本 (4位)			ネパール (5位)			5ヶ国出場選手をコミにした N=50		
	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢
1	178.0	77.0	31	173.0	79.5	27	176.0	69.0	22	173.0	70.0	24	175.0	66.0	19			
2	176.0	70.0	26	178.0	79.5	24	173.0	69.0	18	178.0	72.0	24	180.0	75.0	24			
3	174.0	72.0	26	165.0	77.7	24	175.0	69.0	18	178.0	65.0	20	179.0	72.0	23			
4	186.0	79.0	22	188.0	79.8	28	178.0	70.0	19	180.0	79.0	23	170.0	70.0	21			
5	174.0	72.0	24	178.0	79.0	20	178.0	72.0	20	183.0	70.0	21	170.0	68.0	23			
6	174.0	78.0	20	187.0	79.5	18	171.0	76.0	29	181.0	70.0	20	169.0	68.0	23			
7	177.0	78.0	27	173.0	78.0	25	173.0	72.0	35	167.0	79.0	20	178.0	67.0	20			
8	175.0	69.0	20	183.0	78.0	24	179.0	79.0	33	182.0	75.0	20	168.0	65.0	24			
9	175.0	75.0	22	178.0	79.6	22	175.0	72.0	20	175.0	70.0	19	166.0	65.0	20			
10	178.0	77.0	20	173.0	77.5	18	170.0	69.4	22	170.0	67.0	19	166.0	68.0	20			
身長	176.7 ± 3.4 cm			177.6 ± 6.7			174.8 ± 2.9			176.7 ± 5.1			172.1 ± 5.1			175.6 ± 5.2		
体重	74.7 ± 3.5 kg			78.8 ± 0.9			71.7 ± 3.2			71.7 ± 4.4			68.4 ± 5.1			73.1 ± 4.7		
年齢	23.8 ± 3.5 歳			23.0 ± 3.3			23.6 ± 6.0			21.0 ± 1.8			21.7 ± 3.0			22.6 ± 3.8		
相関係数	r = 0.547			r = 0.587			r = 0.233			r = -0.066			r = 0.633*			r = 0.399**		

**印は、1%、*印は5%水準で有意

1%水準で有意)。インドの体重もパキスタンに次いで上回っている。その上回りは、ネパールに6.4 kg (1%水準で有意)。日本に3.0 kgのうわまりを示しているが有意な差はなかった。

体重で上回っていることは、身長と同様にカバディ競技に大いに影響を及ぼすことが予想できる。カバディでは、体重が80 kg以下¹³⁾ というアジア連盟の規則がある。80 kg以上を超えると試合への参加が出来なくなるという次第である。

筆者は第11回北京大会、第12回広島大会、13回バンコク大会とも役員および国際審判員として参加する機会があり、各国選手の体重を測定し、その測定記録を読み上げる係を担当した。体重測定は、試合開始前日にアジア連盟の役員らの注視のもとで実施されるが、パキスタンチームの選手は、80 kgぎりぎりまで調整をしてきていることが、強く印象に残っている。おそらくパキスタンチームは、体重を制限の80 kg以下にするために強化練習を中心にしながら、また食事制限も若干行って調整していたと思われる。一方、体重の軽い選手の中には、80 kgには及ばないことがわかっていて、靴やジャジーを着けて体重計に乗る選手もみられた。

各国間との比較を行うと、パキスタンがインドに4.1 kg、バングラデシュに7.1 kg、日本に7.1 kg、ネパールに10.4 kgも上回っている (いずれも1%水準で有意)。パキスタンチームの体重の上回りが顕著である。体重で上回っていることは、カバディの試合において、レイダーおよびアンティ力にもかなりの影響を及ぼすことが予想される。レイダーでは、捕まえられても強い力でアンティを引きずって自陣コートに戻ってくることも可能になるし、アンティ側では、体重を利用した強力な捕獲やブロッキングで、レイダーを相手コートに戻さないことなどに応用されるだろう。しかしながら、体重が重いことは有利な反面、素早いフットワークや敏捷性に欠けることにもつながり、体重が重いから有利であるという短絡的な見方は必ずしも適切な表現ではない。

カバディは得点ゲームである。レイダーの攻撃力がチームの勝敗の鍵であり、素早いフットワークを持ってタッチする技術やかけ引き、さらに自陣コートに戻ってくるという歯切れのよさが必要である。アンティは、レイダーを如何に捕まえて、相手コートに戻られないようにするか、個人のみならず、チームワークでの技術や戦術が要求される種目なのである。インドのナショナルコーチである、プラサドラオ氏は「以前は、体重の重い選手が有利であったが、必ずしも体重があれば有利であるということにはならないというのが、現代の最新カバディの特徴であり、単に力や腕力のみではなく、技術や戦術などが重要になってきている」といっている¹⁴⁾。

12回大会出場選手を40名を全部コミにしてみると、身長が 175.6 ± 5.2 cm、体重が 73.1 ± 4.7 kgである。身長に対する体重の似かよいを示す相関係数は、 $r = 0.399$ であった。(5%水準で有意)。おおづかみにみて、第12回広島大会参加のカバディ選手の体格は、176 cm 体重73 kgというところである。これを、「サッカーai、シドニー五輪アジア地区最終予選速報-さあ、シドニー!!」¹⁵⁾のJ1リーグの40名の身長 178.1 ± 4.9 cm、体重 70.0 ± 4.9 kgと比較してみると、J1リーグの選手が、身長で2.5 cm上回っている(5%水準で有意。) 体重では、逆にカバディ選手のコミが、3.1 kg上回っている(1%水準で有意。) J1のサッカー選手の年齢は、22歳以下ということもあって、 21.2 ± 0.9 歳である。カバディ選手コミが 22.6 ± 3.8 歳と年齢的には1.4歳ほど上である。カバディ選手は標準偏差が3.8歳となり、若干年齢に幅がある。

年齢についてみると、参加4ヶ国の中で一番高い年齢を示したインドチームが、 23.8 ± 3.5 歳、次いで、バングラデシュの 23.6 ± 6.0 歳と年齢の混在がみられる。日本は学生を中心にしながら、大学卒業後の選手も加わっても 21.0 ± 1.8 歳というところであった。各国の年齢間の比較では、インドが日本を2.8歳上回った(5%水準で有意。) それだけ全日本チームが若いチームの編成である

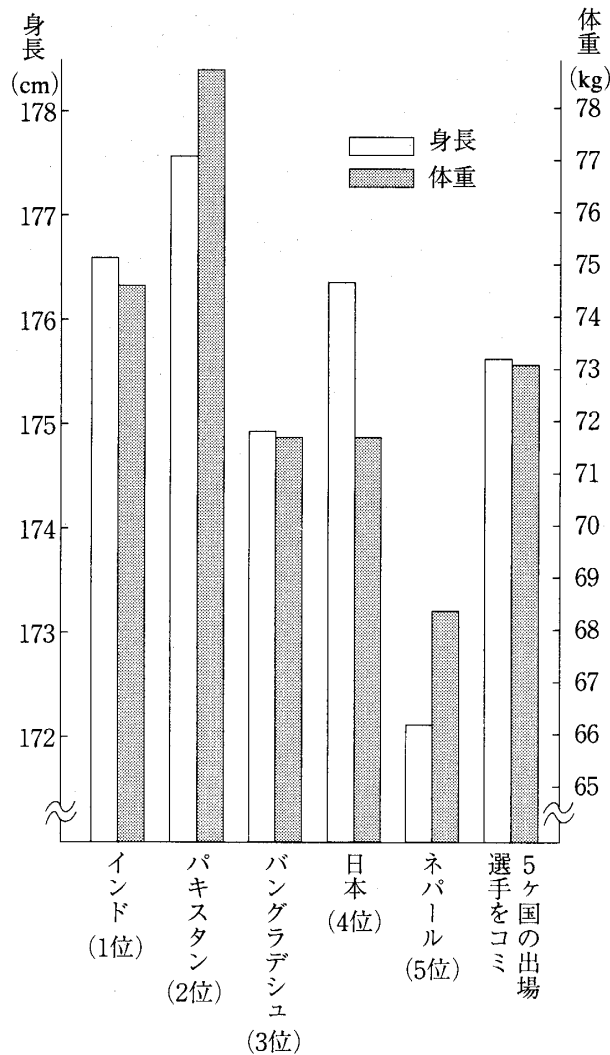


図2 第12回広島アジア大会出場選手の身長・体重

ということがいえる。

図2は、表2の第12回アジア広島大会出場各国チームおよび4ヶ国をコミにした身長と体重を图示したものである。

3. 第8回南アジア連盟大会出場カバディ選手の身長・体重・年齢の平均値・標準偏差

第8回南アジア連盟大会 (South Asian Federation Games, SAF Games) がネパール王国, カトマンズで開催された (平成11年9月25日～10月4日)。今回の参加国は、ネパール, インド, バングラデシュ, ブータン, スリランカ, パキスタン, モルディブの7ヶ国であり, そのうちカバディの参加国は、ネパール, インド, スリランカ, パキスタン, バングラデシュの5ヶ国であった。幸い筆者は中立国審判員として, またアジア連盟の役員として参加する機会に恵まれ, 5ヶ国参加のリーグ戦10試合中, 8試合の審判を行うことができた。4ヶ国の資料は各国の監督またはコーチに筆者が行った体格, 年齢およびカバディ競技歴などに関するアンケート調査に回答をいただいたものである。残念ながら, パキスタンの資料は手違いで入手できなかった。先ほども, 第12回広島アジア大会のパキスタン選手の体重について述べたが, アジア連盟規則で決められている80kg以下ぎりぎりの選手がほとんどであった。この南アジア連盟大会でも, 体重測定をしていて

80 kgを超えてしまう選手が出てしまうのではないかと、秘かに心配していたが、さすがに誰ひとりとして80 kgを超えてしまう選手はいなかった。それは見事な調整ぶりであった。

表3は、第8回南アジア連盟大会出場選手の身長・体重・年齢の平均値・標準偏差である。身長では、バングラデシュが、 181.6 ± 1.3 cmと最も高く、インドチームを5.5 cm、スリランカチームに4.3 cm、ネパールチームに5.2 cm上回っている (いずれも1%水準で有意)。したがって、身長ではバングラデシュチームが上回りを示している。体重について、各国間には数値的な違いがみられる。ネパールとバングラデシュでは、バングラデシュが2.6 kg上回っているが有意な差はみられなかった。

南アジア連盟大会4ヶ国の全選手をコミにしてみると、身長は 177.7 ± 4.2 cm、体重は 74.1 ± 4.1 kgというところである。これを先にみた三つのアジア大会出場の全日本選手をコミにした平均値と比較すると、全日本選手が第8回南アジア連盟出場全選手に、身長で2.7 cm下回っている (1%水準で有意差) 体重では、南アジア大会出場選手が3.8 kg上回りを示している (1%水準で有意)。したがって、この比較では全日本選手が体格的に劣っていることがわかった。

年齢について眺めてみると、インドとバングラデシュの間には、インドチームが1.9歳の年長を示しているが有意な差はみられない。出場選手の年齢をコミにすると、南アジア連盟大会出場選手の年齢は 25.4 ± 2.8 歳というところである。これを先ほどの三つのアジア大会出場選手をコミにした年齢21.5歳と比較してみると、全日本選手が3.9歳も若いことがわかった (1%水準で有意)。しかし、第13回バンコクアジア大会の全日本の年齢は、24.6歳とアジア各国に近いチーム編成になってるところが目にとまる。年齢においてアジア各国のチームは、年齢的にやや高い傾向にあ

表3 第8回南アジア連盟大会出場カバディ選手の身長・体重・年齢

	インド (1位)			パキスタン 資料なし (2位)			スリランカ (3位)			ネパール (4位)			バングラデシュ (5位)			4ヶ国出場選手 をコミにした N = 44
	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	身長	体重	年齢	
1	179.0	76.5	27				177.8	78.0	23	172.7	75.0	29	182.0	71.0	25	
2	177.0	77.8	27				177.8	78.0	31	175.3	67.0	24	180.0	76.0	26	
3	180.0	77.8	26				177.8	78.0	28	180.3	69.0	24	181.0	76.0	24	
4	173.0	78.0	25				185.4	78.0	27	172.7	68.0	28	183.0	78.0	25	
5	175.0	72.0	24				177.8	79.0	24	165.1	78.0	29	184.0	78.0	19	
6	172.0	73.3	23				175.3	78.0	24	180.3	76.5	24	182.0	76.0	22	
7	184.0	75.5	29				172.7	67.0	29	177.8	65.0	22	182.0	72.0	28	
8	177.0	77.0	27				177.8	73.0	21	177.8	67.0	26	180.0	72.0	25	
9	175.0	73.5	33				177.8	76.0	21	176.5	68.0	28	182.0	76.0	27	
10	170.0	70.0	26				172.7	68.0	23	182.9	76.5	27	180.0	72.0	23	
11	177.0	75.0	25							182.9	79.0	22				
12	174.0	66.5	23							172.7	77.0	26				
身長	176.1 ± 3.6 cm						177.3 ± 3.4			176.4 ± 4.9			181.6 ± 1.3			177.7 ± 4.2
体重	74.4 ± 3.4 kg						75.3 ± 4.2			72.1 ± 5.0			74.7 ± 2.5			74.1 ± 4.1
年齢	26.3 ± 2.6 歳						25.1 ± 3.3			25.8 ± 2.4			24.4 ± 2.5			25.4 ± 2.8
相関係数	r = 0.502						r = 0.6566*			r = -0.047			r = 0.518			r = 0.279

*印は5%水準で有意

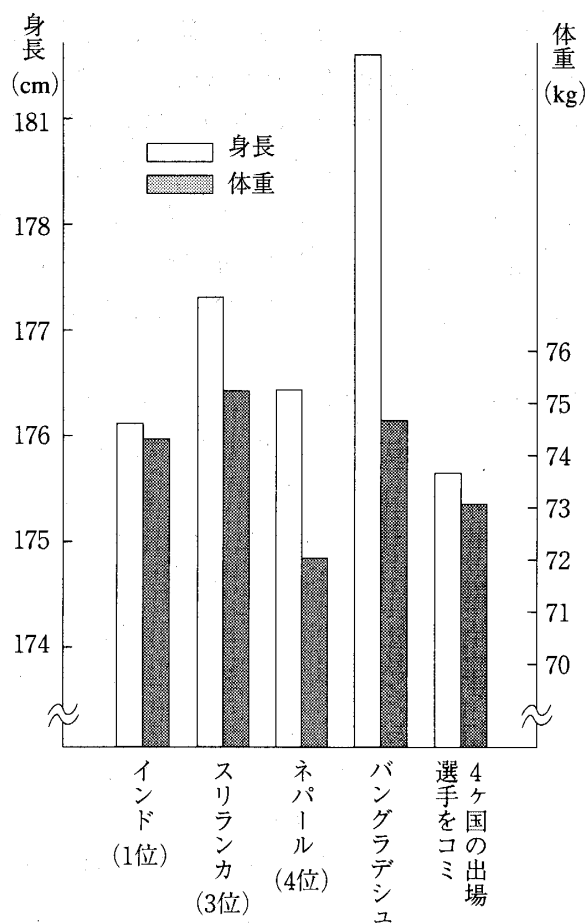


図3 第8回南アジア連盟大会出場選手の身長・体重

ることが窺える。カバディ人口の多い南アジア諸国においても、カバディ競技において選手が心身共に充実し、技術や戦術などを体得して一番力を発揮する年齢になるのには、先にも私見を述べたように、25歳あたりが一つのメドになっていることを物語っているように推測する。

図3は、表3の第8回南アジア連盟大会出場チームの身長と体重を図示したものである。図からも、バングラデシュチームの身長の上回りが突出しているのがわかる。

4. 第13回バンコクアジア大会出場選手の体重の平均値・標準偏差

第13回バンコクアジア大会は、昨年12月に開催された。使用した体重の記録は、公式記録¹⁶⁾をもとにしている。先ほども述べたが、バンコクの大会でも、各国選手の体重測定の見直しを行った。その各国の個々の選手の記録が、表4である。カバディの国際規則では、体重80kg以下という制限がある。身長についての制限がないため、公式記録に記載がない。アジア連盟の役員諸氏には、身長と体重の記載が必要ではないかと進言して賛同を得ているが、公式の会議ではまだ議論がなされていない。次期のアジア連盟の会議では、公式記録の選手一覧表に身長の記載について提案するつもりである。

表4を見ると、パキスタンの体重が 79.0 ± 0.4 kgである。インドが 78.4 ± 1.1 kgである。パキスタンとインドの間には、0.6 kgの数値的な違いがある。その他の国との間には、大きな体重の差が見られる。それを見ていくと、スリランカとは3.7 kg、バングラデシュとは4.4 kg、ネパールとは5.9 kg、タイとは7.5 kg、日本とは8.1 kgの違いである。いずれも1%水準で有意な差が見られる。

表4 第13回バンコク・アジア大会出場選手の体重 (男子)

選手名	パキスタン (銀メダル)	選手名 (金メダル)	インド	選手名 (4位)	スリランカ	選手名 (銅メダル)	バングラ デシュ	選手名 (7位)	ネパール	選手名 (6位)	タイ	選手名 (5位)	日本	7ヶ国の選手 を全部コミ にした N = 50
	体重		体重		体重		体重		体重		体重		体重	
M.S.	79.6	B.P.	78.0	H.N.	75.6	M.I.	75.7	L.B.	75.5	N.F.	74.4	K.I.	71.2	
M.H.	78.4	C.H.	77.5	M.M.	77.1	T.I.	70.7	B.B.	78.5	A.K.	70.3	T.K.	74.3	
M.F.	79.2	B.R.	78.8	D.P.	73.9	M.S.	65.7	S.S.	66.6	T.K.	77.8	T.N.	72.2	
M.M.	78.6	R.S.	79.1	I.S.	73.7	H.R.	73.4	D.K.	79.7	N.T.	64.4	S.S.	69.1	
M.A.	78.9	S.K.	78.6	D.N.	77.7	A.A.	77.3	D.K.	75.1	S.S.	67.7	M.O.	67.5	
Z.A.	79.4	K.S.	79.0	K.T.	75.8	F.T.	75.8	M.M.	67.1	B.K.	74.7	K.M.	74.6	
J.I.	78.4	S.S.	79.3	G.Y.	77.0	M.I.	77.4	G.C.	67.8	U.H.	71.1	R.N.	77.1	
G.M.	79.0	M.G.	75.4	G.S.	77.7	M.J.	76.3	S.C.	69.2	T.K.	76.7	Y.K.	63.6	
A.M.	78.9	R.S.	79.3	S.F.	78.4	M.M.	75.2	U.Y.	72.6	P.U.	61.0	K.M.	63.6	
B.G.	79.6	V.K.	78.8	K.M.	65.6	M.R.	78.2	K.S.	78.9	W.C.	76.4	Y.I.	76.0	
	79.0 ± 0.4 kg		78.4 ± 1.1		75.3 ± 3.6		74.6 ± 3.6		73.1 ± 4.9		71.5 ± 5.3		70.9 ± 4.6	74.7 ± 4.8

したがって、パキスタンチームの体重の上回りが顕著であるということがわかった。体重が3.7～8.1kgも違うことは、カバディの試合の成り行きに大いに影響するだろうということが容易に予想できる。

インドも体重で78.4kg (1.1kg) と、パキスタンに次いで重い。各国との間に3.1kg～6.9kgの違いが見られる (インドとスリランカは5%水準で有意差あり、あとは1%水準で有意な差が見られる)。バンコク大会のチーム成績を見ると、インドが金メダル、パキスタンが銀メダル、そしてバングラデシュが銅メダルであった。スリランカはバングラデシュと引き分けたが、得失点率=全得点/全失点の差で4位に甘んじた。日本は残念ながら5位であった。

体重から成績を眺めると、体重の重いインドやパキスタンチームなどが有利になっていることがわかった。とくに、カバディでは身体接触を持った格闘的な部分が必須であり、レイダーにとっても、パワフルな攻撃で相手にタッチし、自分の陣地に帰ってくることも可能になるといえる。また、アンティにとっても、体重を利用した強力なブロッキングなどの防御が可能になるといえる。したがって、身長と体重で上回っていることは、基本的な体力要素の一つとして優位に立つことにもつながるといえる。しかしながら、一方では体重が重くなれば、それだけ敏捷性や素早いフットワークなどに不利になることも考えられるのであり、カバディの種目特性にあった資質を備えた選手にするために、トレーニングで鍛えていくことなどが必要である。チーム編成にあたっては、大型のチーム編成にするか、比較的大型で動きの速いレイダーやアンティの守備力を整えるか、「山椒は小粒でぴりりと辛い」の例えを持ち出すまでもなく、比較的小型でも機動力の発揮できるチームを編成するかは、監督およびコーチの手腕に委ねられよう。

5. 南アジア連盟大会5ヶ国コミにした選手とアジア大会出場全日本カバディ選手

および他のスポーツ種目選手との身長・体重・年齢の比較^{17,18,19,20,21)}

表5は、第8回南アジア大会出場5ヶ国コミのカバディ選手とアジア大会出場全日本選手、および他のスポーツ種目選手との身長・体重・年齢の平均値・標準偏差である。これを第8回南アジア連盟大会5ヶ国選手をコミにして、T-スコアで50点とした場合と、それを100%にした場合の、全日本アジア大会出場選手および他のスポーツ種目選手との比較を示したものが、表6である。南アジア大会4ヶ国の選手コミををT-スコアで50点の基準としたのは、4ヶ国コミの身長・体重・年齢(177.7cm, 74.1kg, 25.4歳)と、筆者の考えるカバディ選手が心身ともに充実し、最高の力を

表5 第8回南アジア連盟大会出場5ヶ国チームをコミにした選手とアジア大会出場全日本カバディ選手および各種スポーツ選手の身長・体重・年齢の平均値・標準偏差 (男子)

	第8回アジア連盟大会出場全選手コミ N = 44	第12回広島アジア大会出場全選手 N = 50	第11回北京アジア大会出場全日本選手 N = 12	第12回広島アジア大会出場全日本選手 N = 10	第13回バンコクアジア大会出場の全日本選手 N = 10	全日本ハンドボール選手 N = 12	'96世界野球出場全日本野球選手 N = -	'96世界野球出場のキューバ選手 N = -	J1プロサッカー選手 N = 40	大学陸上選手100mを10秒台選手 N = 13	二松学舎大学国際政治経済学部平成11年度1年生 N = 64 (18歳)
身長(cm)	177.7 ± 4.2	175.6 ± 5.2	174.8 ± 3.3	176.7 ± 5.1	173.7 ± 4.4	184.2 ± 5.4	179.0 ± 4.4	176.2 ± 3.5	178.1 ± 4.9	177.9 ± 6.5	172.3 ± 6.0
体重(kg)	74.1 ± 4.1	73.1 ± 4.7	68.6 ± 4.0	71.7 ± 4.4	70.9 ± 4.6	83.5 ± 4.9	79.0 ± 6.1	78.7 ± 10.1	70.0 ± 4.9	69.2 ± 7.2	63.7 ± 8.3
年齢(歳)	25.4 ± 2.8	22.6 ± 3.8	21.5 ± 1.4	21.0 ± 1.8	24.6 ± 1.5	26.3 ± 2.0	23.6 ± 3.2	28.4 ± 3.5	21.2 ± 0.9	—	

表6 第8回南アジア連盟大会の参加チームをコミにした身長・体重の平均値をT-スコアで50点とした場合の表5のTスコア値 (男子)

	第8回アジア連盟大会出場全選手をTスコアで50点とした場合	第12回広島アジア大会出場全選手	第11回北京アジア大会出場の全日本選手	第12回広島アジア大会出場の全日本選手	第13回バンコクアジア大会出場の全日本選手	全日本ハンドボール選手	'96世界野球出場全日本選手	'96世界野球出場のキューバ選手	J1プロサッカー選手	大学陸上100mを選手	二松学舎大学平成11年度1年生(国際政治経済学部学生) N = 64 (18歳)
身長	50点	45.0 (90.0)	43.1 (86.0)	47.6 (95.2)	40.5 (81.0)	65.5 (131.0)	53.1 (106.2)	46.4 (92.8)	51.0 (102.0)	50.5 (101.0)	37.1 (74.2)
体重	50点	47.6 (95.2)	36.6 (73.2)	44.1 (88.2)	42.2 (84.4)	72.4 (144.8)	62.0 (124.0)	61.2 (122.4)	40.2 (80.4)	38.0 (76.0)	24.6 (74.2)

注) 数値の上段はT-スコア値, 下段の()内の数値は, T-スコア50点を100とした場合の%を示す。

発揮できる身長・体重・年齢 (177 cm, 75 kg, 25 歳) とがほぼ符合しているからである。

表6からも読み取れるが、全日本ハンドボール選手と'96世界野球出場全日本選手の身長がTスコアで53.1～65.5点、106～131%の上回りを示している。体重でも、62.0～72.4点、124～144.8%の上回りを示している。'96キューバの世界野球出場の選手の体重がTスコアで61.2点、122.4%の上回りを示している。全日本男子のハンドボールチームは、体格アップを図り、外国の強豪チームと対等に身体接触プレーができるかということを目標にして訓練している²²⁾。

比較のために、平成11年入学の二松学舎大学国際政治経済学部18歳の1年生も示してみると、二松のTスコアは37.1点、74.2%というところである。南ア連盟大会出場選手コミの上回りが大きい。

体重制限のない種目と、カバディのように体重制限のある種目とでは条件が少し違うことにも注意しておかなければならない。カバディ選手の体格は、やはり身長175～180 cm、体重75 kg～あたりが、俊敏な攻撃・防御のできる体格ではないかと考える。チーム編成にあたっては、年齢などにも配慮をしながら、攻撃のうまい選手、防御に強い選手、体格や体力的に優れた選手などを1チーム12人の編成の中で、バランスよく配置してチームの強化をしていくことが望まれる²³⁾。

Ⅲ 要 約

日本とアジア諸国のカバディ選手の身長・体重および年齢についての実態を分析して、得られたことを以下に要約する。

1. 第11回北京アジア大会出場的全日本カバディ選手の身長は 174.8 ± 3.4 cm、体重は 68.6 ± 4.0 kgである。年齢は、 21.5 ± 1.4 歳であった。第12回広島アジア大会の全日本選手は、身長 176.7 ± 5.1 cm、体重は、 71.1 ± 4.4 kgである。年齢は、 21.0 ± 1.8 歳であった。第13回バンコクアジア大会では、身長 173.7 ± 4.4 cm、体重 70.9 ± 4.6 kgであった。年齢は 24.6 ± 1.5 歳であった。三つの大会をコミにしてみると、身長が 175.0 ± 4.4 cm、体重が 70.3 ± 4.5 kgであった。おおづかみにみて、全日本カバディ選手の身長は175 cm前後、体重は70 kg前後というところである。年齢については、大学卒業後数年の25歳前後が一番力を発揮できる頃と心算するが、バンコクアジア大会の全日本選手の24.6歳は筆者の考える国際的に力を発揮するカバディチーム編成に符合する。

2. 第12回広島アジア大会出場選手の身長では、パキスタンチームが 177.6 ± 6.7 cmと一番大きい。体重でも 78.8 ± 0.9 kgと一番重く、標準偏差の0.6 kgからも規則ぎりぎりの80 kg以下の選手でチームを編成してきていることが示されている。各国間の身長の比較をすると、インドとネパールに4.6 cmの差があり、パキスタンとネパール間には5.5 cmもの開きがみられる。体重においても、インドに4.1 kg、日本に7.1 kg、ネパールに10.4 kgもの差がみられた。広島大会参加の5ヶ国の選手をコミにしてみると、身長が 175.6 ± 5.2 cm、体重が 73.1 ± 4.7 kgである。年齢は、比較的若く、 22.6 ± 3.8 歳であった。身長と体重の相関係数は、 $r = 0.399$ (5%水準で有意) ほどであった。

3. 第8回南アジア連盟大会出場5ヶ国 (インド (金メダル)、パキスタン (銀メダル)、スリランカ (銅メダル)、ネパール (4位)、バングラデシュ (5位)) の身長・体重・年齢についてみると、バングラデシュの身長が一番高く 181.6 ± 1.3 cmであり、インドを5.5 cm、ネパールを5.2 cm、スリランカを4.3 cm上回っていることがわかった。体重については、数値的に違いがみられるのみにとどまった。5ヶ国の全選手をコミにしてみると、身長が 177.7 ± 4.2 cm、体重が 74.1 ± 4.1 kg

というところであった。年齢では、 25.4 ± 2.8 歳であった。

4. 第13回バンコクアジア大会出場選手の体重についてみると、パキスタンが 79.0 ± 0.4 kgと一番重く、次いで、インドの 78.4 ± 1.1 kg, スリランカの 75.3 ± 3.6 kg, バングラデシュの 74.6 ± 3.6 kgなどとなっている。日本は 70.9 ± 4.6 kgであった。パキスタンチームの体重がアジア連盟規則の80kg以下ぎりぎりのチーム編成をしてきていることが数値からもわかった。しかも体重の標準偏差も ± 0.4 kgと小さく、それだけ80kgに近い選手が集まっていることを物語っている。ちなみに、インドが金メダル、パキスタンが銀メダル、バングラデシュが銅メダル、スリランカは惜しくも銅メダルを逸したが、バングラデシュと引き分けての得失点率で敗れた。こうして見ると、体格的に優位なチームが上位を占めていることに着目できる。日本の体重は 70.9 ± 4.6 kgであった。

5. アジア大会参加のカバディ選手と他のスポーツの選手との比較するために、第8回南アジア連盟大会をTスコアで50点とし、またその伸びについてみると、全日本男子ハンドボール選手の身長・体重が上回り、Tスコアでみると、身長で65.5点, 131%, 体重で72.4点, 144.8%である。'96世界野球出場全日本男子選手が身長・体重で上回り、Tスコアで53.1点, 106.2%, 体重で62.0点, 124.0%を示している。'96世界野球に出場したキューバ選手には、南アジア大会カバディ選手が、身長で上回り、体重では下回った。J1のサッカー選手との比較では、身長ではJ1選手が51.0点, 102%とわずかに上回っているが、ほとんど同じ位であるといえる。体重では、J1選手が40.2点, 80.4%と、カバディ選手が10点, 20%近く上回っていることが示された。

注

- 1) 二松学舎大学「大学カバディチーム発祥の地」記念碑建立委員会(委員長:新井慧誉, 委員:金子茂, 森本富子)発行の記念碑報告書(平成9年<1997.10.31>)の13~15頁に「大学カバディチーム発祥の地」記念碑建立縁起、一日本とカバディと題してインドから日本に紹介されたカバディ草創期のことや、二松学舎大学カバディクラブの歩みなどが新井慧誉教授によって詳細に述べられている。
- 2) 前掲1) インドの国技カバディを日本の大学で初めて導入し、二松学舎大学に最初のクラブチームが結成された。そのことを記す記念碑は、建碑趣旨に多くの教職員、卒業生、その他有志から建碑建立浄財と、建碑祝辞(JAKA:石橋一弥会長, AAKF:A.K.サハ事務総長)を賜った。記念碑は本学の創立120周年に当たる平成9年(1997)10月10日に沼南校舎敷地の図書館前に建立された。同日付で大学に寄付され、学校法人二松学舎の小林日出夫理事長に『寄付目録』が手渡された。
- 3) ベルナーレ・ジレ, 近藤等訳:スポーツの歴史, 白水社, 17頁, 1963。
- 4) E. Prasado Rao: Modern Coaching in Kabaddi, D. V. S. Publications, New Delhi, Chap. 1, P. 1. 1994.
- 5) R.G.Goel, Veena Goel, Gaurav Goel: Encyclopaedia of Sports and Games, Twelfth Revised, Vikas publishing House PVT Ltd. New Delhi, P.365, 1995.
- 6) 前掲3) P. X III.
- 7) 前橋明, 中村和彦編:みんなの健康スポーツ(前編), 明研図書出版, 金子茂分担執筆「カバディ」のP. 221, 1992.
- 8) 第11回北京アジア大会出場選手の身長・体重・年齢は、第11回北京アジア大会カバディ競技-参加者必携ガイドブッカー, 1990.9.14付の日本アマチュアカバディ協会選手強化本部発行のガイドブックから引用。第12回広島アジア大会のものは、The 12th Asian Games Hiroshima 1990の公式発表の選手一覧表から引用。第13回バンコクアジア大会のものは、身長は全日本強化選手の体力測定資料から引用。体重はバンコク大会のカバディ競技前日に測定した実際の公式記録から引用。
- 9) 厚生統計協会(財団法人)編:国民衛生の動向, 厚生の指標-臨時増刊-, 1999年第46巻9号, 472頁。
- 10) 久松栄一郎, 前川峯雄, 江橋慎四郎編:現代コーチング, 杏林書院, 73頁, 1963。
- 11) 前掲:8)の第12回広島アジア大会公式記録の選手一覧表から引用。
- 12) カバディは7人対7人で行う競技である。一人のレイダーが7人の敵のアンティのコートに攻め込み、タッチをして帰ってくれば、そのタッチした人数分だけレイダー側の得点になる。タッチされた選手はコート外に出て、シットイングブロックに座る。もし、レイダーが捕まって自陣に戻れない時は相手側の得点

になり、コートの外に出てシッティングブロックに座る。コートの外に出た選手は、味方が得点すればその人数分だけコートに復帰しプレーできる。レイダーが、カバディ、カバディとリズムカルに唱えることをキャント Cant という。アンティ側は、最大7人であるがアウトになれば、守る人数は少なくなる。したがって、7人～1人までの防御体制になる。レイドは、Aチームが行うと、次はBチームとなり、時間終了までそれぞれのチームが交互に行う。途中で7人が全部アウトになると、ローナ Lona という規則があり全員コートに復帰できるが、その時ボーナス点として、2点を相手側に献上しなければならない。競技時間は、男子が<20分～5分休み～20分>。女子が<15分～5分休み～15分>である。勝敗は競技終了後の得点によって決まる。

- 13) アジア連盟では、男子の体重80 kg以下と定めている。日本においても国際規則に準じているが、最近国内大会では85 kg以下としている。広く選手を発掘しようということと、85 kg位の選手が国際規則の80kg以下に減量(約5～6%)しても、カバディの能力に支障を来さないだろうということが主な理由である。
- 14) 前掲：4) のXⅢと11章123頁の上級防御技術のチェーンシステムの中で述べている。
- 15) 日刊スポーツ出版社発行の：サッカーai増刊さあシドニー！！, 20.46-59頁, 1999から引用。
- 16) 前掲：8) の第13回バンコクアジア大会のカバディ競技前日に測定した公式記録から引用。
- 17) 久木文子, 高橋勝美, 田中守, 竹内正雄, 西山逸成：全日本男子ハンドボール選手の皮下脂肪厚および筋肉厚の変化—約1年間の経時的結果—, 第48回日本体育学会(於：新潟大学)の大会号, 456頁, 1997。
- 18) 積山敬経, 国分大和, 船渡和男, 増島篤：全日本対キューバの野球ゲーム中における打撃の比較について, 第48回日本体育学会(於：新潟大学), 大会号の, 454頁, 1997。
- 19) 前掲：18)
- 20) 前掲：15)
- 21) 榎本好孝, 久野譜也, 狩野豊, 宮下憲, 山中邦夫, 宮丸凱史, 加藤謙一, 勝田茂：スプリンターの大腰筋横断面積と疾走速度の関係, 第48回日本体育学会(於：新潟大学)の大会号, 261頁, 1997。
- 22) 前掲：17)
- 23) 前掲：5) のE.Prasado Raoは, 196～197頁で, 12人のメインチームの選考においては, 選手が備える攻撃に必要な10項目(1. 一般的な体力, 2. カバディに必要な体力, 3. 攻撃能力, 4. フットワーク, 5. 得点率, 6. 決断能力, 7. 捕獲から逃れる能力, 8. 戦術力, 9. 守備の位置取り, 10. サポート力。防御に備える10項目(1. 一般的な体力, 2. カバディに必要な体力, 3. 適切な位置でのプレー, 4. 捕獲能力, 5. 得点率, 6. 自己統制, 7. チームメイトとの協同, 8. 戦術をもったプレー, 9. サポート力, 10. 確実なレイド能力)などを具体的に挙げている。また12人のうち, 攻撃・防御に秀でた選手をバランスよく配置してチームを編成すべきであると指摘している。そのチーム編成にあたっての内訳は次のようである。
 - a) Corner4人(メインCorner2人と, どこでも守れる2人)。
 - b) Cover4人(メインCover2人とレイダー2人)。
 - c) レイダー又はどこでも出来る4人(メインレイダー2人と, どこでも出来る2人)。以上が, ラオ氏のチーム編成にあたっての考えである。実際には5段階評価法を用いて, 攻撃と防御の各10項目を点数化して選手選考をしている。その評価点は, Excellent/very good・・・5点, Good・・・4点, Average・・・3点, Below Average・・・2点, Poor・・・1点または0点である。